【研究論文】

障害を持った人の役割獲得に向けた支援方法についての一考察

―障害経験を活かした役割を持つ人へのインタビューを通じて―

神田 太一[1)]，田島 明子[2)]

1）社会医療法人 財団新和会 八千代病院総合リハビリセンター

2）湘南医療大学　保健医療学部　リハビリテーション学科

E-mail：kandykandy55@yahoo.co.jp

A Study on Methods of supporting Disabled People in defining their roles through

–Interviews with Disabled People Whose Roles Utilize Their Experience of Disability–

Taichi Kanda[1)], Akiko Tajima[2)]

1）Social Medical Corporation Foundation Shinwakai Yachiyo Hospital General Rehabilitation Center

2）Shonan University of Medical Sciences, Faculty of Health Sciences

要旨

障害経験を活かした役割獲得の過程を明らかにすることを目的とし，障害経験を活かした役割のある障害当事者８名を対象として，役割獲得の過程についてインタビュー調査を実施し，質的帰納的分析を行った．結果，障害経験を活かした役割の獲得に至る過程において，①役割に対する否定的な認識が肯定的な認識に変化，②障害に対する否定的な認識が肯定的な認識に変化，③他者・社会との摩擦が他者･社会との肯定的な関係に変化，④肯定的なサポートや期待感があった，⑤阻害要因はサポートがないことや期待感がないことが明らかになった．障害を持った人が自己価値を感じられる役割を獲得するためには，障害経験に対する価値に気づき，役割を創造することが有効であると考えられた．

キーワード：役割，障害経験，インタビュー

Key Words：Role，Experience of Disability，Interview

1．はじめに

障害を持った人にとって障害が生じたことによる役割の喪失は，心理面への影響のみならず人生へも大きく影響するため，作業療法において障害を持った人が役割を獲得していくことは治療の対象となっている．作業療法に影響を与える役割獲得理論としてHeard（1977）の作業役割獲得モデル，Kielhofner（2009，山田訳2014）の人間作業モデルがある．Heardは内的期待（個人が自らに求める期待）と外的期待（社会や他者からの期待）の葛藤を調整，意思決定をすることによって新しい作業役割遂行がなされると考えた．Kielhofnerの人間作業モデルでは，役割概念は習慣化システムに位置づけられており，日常生活を作り上げる要素として捉えられている．また「役割同一性」について「どのような役割同一性も社会が役割にあてがった特性とその人がその役割にあてがった個人的解釈の両者を取り入れることを意味する」（Kielhofner，2009/2014）と説明されており，役割に付随する自己同一性とは外的期待を含んだ内的期待を基に生成されると言える．つまり作業療法理論における役割獲得とは，自己と他者・社会との関係から生まれ，その双方が持つ意図の調和から成るものであると言える．このような背景から，外的期待と内的期待との調整を行うなかでかえって内的期待が低まってしまうことも生じうると考え，「障害経験を活かした役割の創造」が障害当事者にとって内的期待が低まらず，自己への価値を持てる役割獲得のために最良の方法であると考えた．

そこで本研究では，自己への価値を持てる役割獲得に向けた作業療法支援の在り方を考察するため，障害経験を活かした役割の獲得に至った障害当事者を対象とし，障害を持つ以前の生活から障害を持ち，障害経験を活かした役割獲得に至るまでの語りをインタビュー調査し，その過程を明らかにすることを目的とした．

2．研究方法

1）対象

対象は，障害経験を活かした役割を持つ障害当事者とした．障害経験を活かした役割とは，障害を持った人が障害を持つ生活から得た知見について他者に求められ，伝達した経験を持つ人，またはそれを仕事としている人とした．一例をあげると，脳卒中後の片麻痺者が調理を行えるようになるだけでは障害経験を活かした役割とは見做さず，調理を行えるようになった経験を活かして，他の片麻痺者に自身が獲得した調理方法を教示することを，障害経験を活かした役割とした．

対象者は，共同研究者と研究者の知人で，本研究の対象条件に見合い，研究協力に同意し，1時間程度のインタビュー調査に応じることの可能な身体状況にある人を候補者とした．対象候補者は8名であったが，8名より研究協力の同意を得ることができた．対象者の基本情報は表1のとおりである．

2）インタビュー方法

インタビューガイド（表2）を基に，半構造的面接法による個別インタビュー調査を実施した．インタビュー内容はICレコーダーにて音声を録音した．また筆記による記録も併せて行った．

3）分析方法

音声データの逐語禄を作成し，質的帰納的分析を行った（Flick，2011）．具体的には，1事

表1　対象者の基本情報

ケース	性別	年齢	疾患	障害・生活状況	発症時期	障害経験を活かした役割
A	女性	50歳代	脳血管疾患	失語症　半側空間無視　独歩	成人期	講演活動 高次脳機能障害者からの相談依頼 非常勤講師にて障害経験を話す
B	男性	30歳代	副腎皮質ジストロフィー	杖歩行	成人期	障害者就労施設での管理業務 経営するインターネット販売会社での障害者雇用 民間の治療方法の広告塔に自らが立つ
C	男性	60歳代	脊髄損傷(第8胸椎損傷)	車椅子移動	成人期	脊髄損傷者用の車椅子販売会社の経営
D	男性	30歳代	下肢切断	義足を使用して日常生活自立	成人期	義足を使用する義肢装具士
E	女性	30歳代	重症筋無力症	電動車椅子生活 人工呼吸器装着（終日）	成人期	講演活動 非営利団体の代表
F	男性	30歳代	シャルコマリートゥース病	両下肢短下肢装具 ロフストランド杖	小児期	講演活動 患者会活動 作業療法士
G	男性	40歳代	脊髄損傷(第4胸椎損傷)	車椅子移動	成人期	障害者自立支援センター勤務
H	男性	40際代	視覚障害	弱視	小児期	盲学校教諭を目指す学生への教育 点字機器の開発会社での勤務

表2　インタビューガイド

【障害を活かした役割を獲得する以前について】
・障害を持った時,その障害についてどのように感じましたか
・発症により失ってしまった役割はありますか
・発症により失ってしまった役割がある場合,失ったことをどのように感じましたか
【障害による認識の変化について】
・発症によって,貴方が貴方自身に対する期待に変化はありましたか
・発症によって,社会が貴方に対する期待に変化はあったと思いますか
・発症によって,社会が貴方に対する期待に変化があった場合,変化をどのように感じましたか
【障害を活かした役割の創造について】
・障害を活かした役割を始めた理由は何ですか
・障害を活かした役割に貴方が期待するものは何ですか
・障害を活かした役割を獲得した後,社会が貴方に対する期待に変化はありましたか
【障害観について】
・障害を活かした役割における障害の価値について,貴方はどのように考えますか
・障害を活かした役割活動をする以外で,普段,貴方にとって障害の価値はどのようなものですか

例ごとに研究目的に即して質的データを１つの意味内容になるようにラベル化した．ラベル化したデータを内容の類似性と差異性に従って分類しコード化した．得られたコードはさらに二方向に分節化でき，一方向は，障害経験を活かした役割の獲得に至る過程であり，もう一方向は，障害経験を活かした役割の獲得に至るための要素であった．それら二方向を横軸縦軸として各事例の結果をマトリクスに表し，さらに８事例の結果を統合化したマトリクスを作成した．マトリクス化の過程において縦軸の要素のカテゴリ化とテーマ化をした．一連の分析の厳密性を高めるために質的研究の指導経験を持つ大学院の指導教員と概念化の検討を繰り返した．

4）倫理的配慮

研究協力候補者には研究の趣旨について口頭にて説明し，内諾を得られた人に対して，文書

と口頭にて研究の趣旨と倫理的配慮について十分に説明を行い，研究参加について熟慮するための一定期間を確保したのちに研究協力の同意を得た．聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得てから研究を実施した（承認番号16073）．

3．結果

8事例から得られたラベル数は322，コード数は115であった．1事例ごとのラベル数とコード数は表3のとおりであった．

各事例の結果を比較検討し，障害経験を活かした役割を獲得する過程を示す横軸として，「発症前」「発症後」「役割獲得期」「役割創造期」の4期に分節化され，要素を示す縦軸として，「役割に対する願望」「役割に対する認識」「障害に対する願望」「障害に対する認識」，「サポート」「周囲からの期待感」「他者・社会への願望」「他者・社会との関係」の8つのカテゴリが生成され，それらは，「自己」と「他者・社会」の2テーマに分類された．

「自己」に関しては，「役割に対する願望」「役割に対する認識」「障害に対する願望」「障害に対する認識」，「他者・社会」については，「サポート」「周囲からの期待感」「他者・社会への願望」「他者・社会との関係」であった．

また，「役割に対する認識」は肯定・否定，「障害に対する認識」は肯定・否定・中立，「サポート」は肯定／有・否定／無，「周囲からの期待感」は肯定・否定，「他者・社会との関係」は摩擦・肯定に分節化された．

表3　1事例ごとのラベル数とコード数

ケース	ラベル数	コード数
A	28	12
B	27	11
C	38	10
D	30	11
E	54	18
F	65	20
G	34	14
H	46	19

「役割に対する願望」とは，自分の役割に対する願い，「役割に対する認識」とは，自分に役割を担う価値があるか否かの認識，「障害に対する願望」とは，自分の障害に対する願い，「障害に対する認識」とは，自分の障害に価値があるか否かの認識，「サポート」とは，他者や社会からのサポートがあるか否か，「周囲からの期待感」は，他者や社会からの期待感があるか否か，「他者・社会への願望」は，他者・社会へ願うこと，「他者・社会との関係」は，他者・社会との認識の差異の有無を意味している．

なお，データの詳細は神田（2018）に記載しているので，そちらを参照されたい．

1）障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

1事例のマトリクスについては，A氏のマトリクスのみを提示する（図1）．横軸が障害経験を活かした役割を獲得する過程，縦軸が障害経験を活かした役割獲得の要素であり，各セル内に該当するコードが表記されている．8事例すべて同様の図を作成した．

2）8事例を統合化した障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

8事例を統合化した障害経験を活かした役割の獲得に至る過程について，8つのカテゴリの関係性を示したものが図2である．縦軸は，「役割に対する願望」「役割に対する認識」を「役割」，「障害に対する願望」「障害に対する認識」を「障害」，「サポート」「周囲からの期待感」を「サポート・期待感」，「他者・社会への願望」「他者・

			発症前	発症後	役割創造期	役割獲得期
自己	役割に対する願望		障害を持った人に対して関わりを持ちたい			患者やセラピストの役に立ちたい
	役割に対する認識	肯定	障害を持ってもその人にしかできない役割がある	障害のある私にしかできないことがある 障害を持ったことによるワクワク感	障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる	障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる
		否定		障害を持ったことで出来ないことがあるために感じる喪失感		
	障害に対する願望					
	障害に対する認識	肯定		発症前の知識や経験から障害を持っても自分であれば困難を乗り越えられる		障害のある自分に存在価値を感じる
		否定				
		中立		障害を持ったことを受け入れる		
他者社会	サポート	肯定・有		夫からの支え	夫からの支え	夫からの支え
		否定・無				
	周囲からの期待感	肯定				自分を頼りにしてくれる人がいる
		否定				
	他者・社会への願望					
	他者・社会との関係	摩擦				
		肯定				

図1　A氏の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

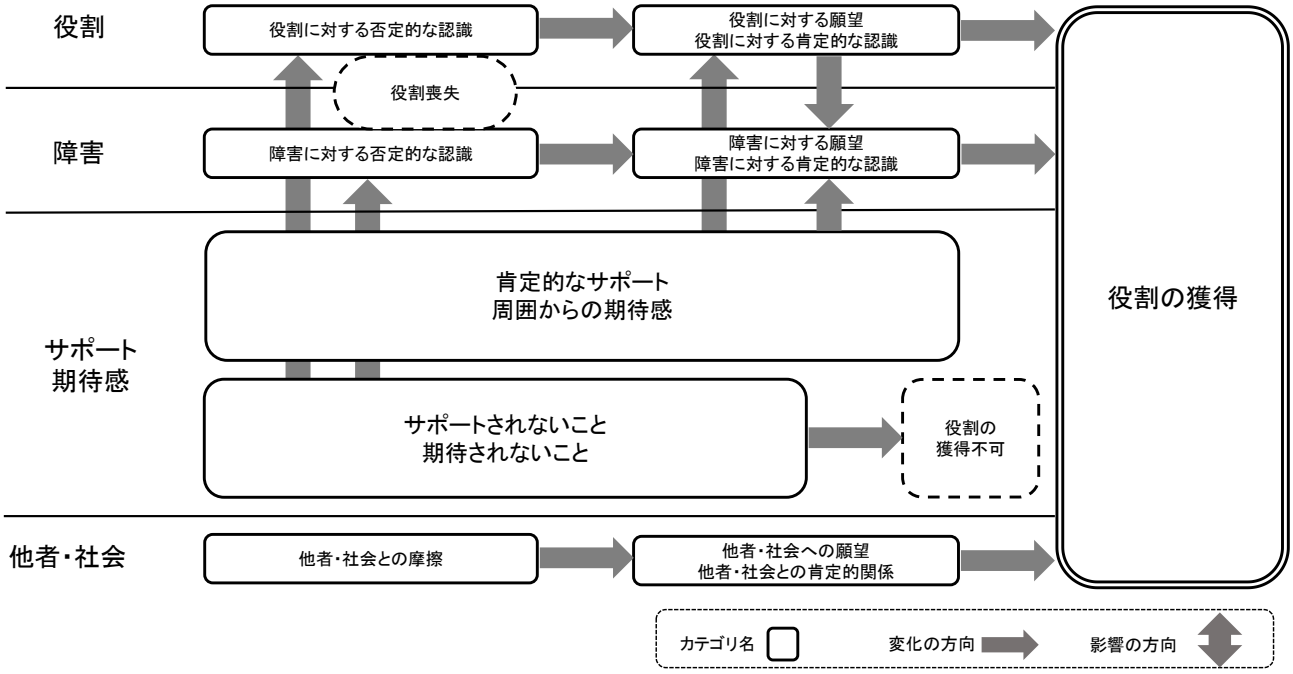

図2　カテゴリーに注目した障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

社会との関係」を「他者・社会」と表した．横軸は，カテゴリに注目した障害経験を活かした役割の獲得に至る過程を示した．

関係を説明するために，カテゴリは「」，カテゴリに含まれた各事例のコードについては【】で表記した．

(1) 障害による役割喪失が「障害に対する否定的な認識」や「役割に対する否定的な認識」に与える影響

本研究の結果から，障害を持ったことで【将来の生活のイメージができない】【どこまで生活が戻るのか考えられない】といった今後の生活に対する不安を持つようになり，【障害は疎ましい】というような「障害に対する否定的な認識」を持つようになっていた．また，役割についても，【障害を持ったことで出来ないことがあるために感じる喪失感】【周囲の期待に応えられない】という「役割に対する否定的な認

識」から【自分に自信がない】【家族に申し訳ない】というような自己価値の低下を経験していた.

(2)「役割に対する否定的な認識」が「役割に対する願望」や「役割に対する肯定的な認識」に変化し障害経験を活かした役割の獲得に至った過程

8事例とも，発症により「役割に対する否定的な認識」を持っていたが,「役割に対する願望」や「役割に対する肯定的な認識」に変化したことで障害経験を活かした役割獲得に至っていたことが明らかになった．この背景には【自分が持つ情報に需要があると想い情報を発信した】など，障害経験があることで出来ることがあると気づいたこと，【患者の経験や困っていることを通訳して医療界に伝えたい】など，やりたいことが見つかり希望を持てたことがあった．また「役割に対する願望」や「役割に対する肯定的な認識」に変化した背景には,【障害があってもやりたいことはできる】と「障害に対する肯定的な認識」や「障害に対する願望」を持てたこと ,【声を掛けてもらい就職することができた】など「肯定的なサポート」を受けたこと,【障害者としての意見を必要とされている】など「肯定的な期待感」を持てたことがあった.

獲得をした役割を通して【障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる】など，同じ障害を持った人や障害を持った人の家族，一般の人，医療従事者へのアドバイスを行うようになった．また【患者やセラピストの役に立ちたい】【より良い車椅子を提供したい】【ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい】など，今後に向けた希望を抱けるようになっていた.

(3)「障害に対する否定的な認識」が「障害に対する願望」や「障害に対する肯定的な認識」に変化し障害経験を活かした役割の獲得に至った過程

8事例とも，発症により「障害に対する否定的な認識」を持ちながらも,「障害に対する願望」や「障害に対する肯定的な認識」に変化したことで，障害経験を活かした役割獲得に至っていたことが明らかになった．この背景には【出来ることと出来ないことを理解して工夫することで生活が確立した】経験や【自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる】と障害への意識が変わったこと，【病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる】と障害を上手く活用できると思えるようになったこと，【友人の一言で価値観が変わり自分自身を視覚障害者と位置づけて生きていくことにした】【障害があってもやりたいことはできる】など，障害を肯定的に受け止めることができたこと,【障害を持っていても普通の生活をしたい】と想えたことがあった.

また【病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる】【障害があってもやりたいことはできる】など「役割に対する願望」や「役割に対する肯定的な認識」を持てたことも背景にあった．そして獲得した役割を通じて，障害のある自分に存在価値を感じたり，障害が自分の役に立っていると想えたりするなど，障害のある自己を肯定的に認められるまでに至っていた.

(4)「肯定的なサポート」や「周囲からの期待感」が「役割に対する肯定的な認識」や「障害に対する肯定的な認識」へ与えた影響

事例のなかには，障害当事者の視点から発言ができる人材として期待をされて【声を掛けてもらい就職することができた】など他者からの肯定的なサポートや，【障害者としての意見を必要とされている】といった他者からの肯定的

な期待感があったことが役割に対する願望や肯定的な認識を持つ背景にあった．また障害当事者として障害を持つ人のボランティアに対して講師をする機会があり，講演を聴講した障害者自立支援センター（Center for Independent Living：以下，CIL）の人から講演が好評でCIL に誘われるなど，障害経験を活かした活動や障害当事者として経験を活かしたい想いに他者が期待感を持ち役割を得ていたことが明らかになった．さらに獲得した役割を通して【患者の経験についての発言を求められる】【当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある】など障害経験を活かした役割に対して他者から期待感を持たれていると感じられるようになっていた．

(5)「他者・社会との摩擦」が「他者・社会への願望」や「他者･社会との肯定的な関係」に変化した過程

障害経験を活かした役割の獲得過程における「他者・社会への願望」「他者・社会との関係」の変化に着目すると，発症により【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う】など障害を持つ自身と健常者との考え方が違うことや【世の中に障害を持った人にとってのバリアがあることを諦める】など障害を持った人にとってのバリアについて他者・社会との認識に違いがあることの語りがあった．しかし違いの認識から【患者に寄り添える感覚を医療従事者に持ってもらいたい】など，他者・社会に対して希望を抱くようになったことが明らかになった．役割獲得後は，役割を通して【障害を持った人のために社会が変わらないといけない】と想うなど社会の方が変わるべきという認識に変化していたことが明らかになった．

(6)「サポートされないこと」や「期待されないこと」が役割獲得へ与えた影響

本研究の結果から【視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる】【教員としての役割が出来なくなり学内での期待の薄れを感じた】という語りもあった．「サポートされないこと」や「期待感されないこと」が役割や障害に対する否定的な認識に影響を与えていることが明らかになった．

4．考察

結果より，障害経験を活かした役割の獲得過程は，障害に対して否定的な認識を持ちながらも，役割に対する願望や肯定的な認識を持つことでその獲得に至っていた．役割に対する願望や肯定的な認識を持った背景には，障害に対する願望や肯定的な認識を持てたこと，他者・社会から肯定的な期待感やサポートがあった．一方，障害を持った人が障害経験を活かした役割を獲得することを困難にするものとして，障害や役割に対する否定的な認識や他者・社会からのサポートがないこと，他者・社会から期待がなされていないことが関係していた．本研究の結果は，作業療法学における役割獲得概念では説明できない新たな視点が含まれていた．それは①必ずしも外的期待に照準を合わせずとも，②内的期待を高めることで自己価値を見出せる役割獲得が可能になるということである．そこで，この２点から障害を持った人の役割獲得の支援方法について考察を行う．

1）低い外的期待に照準を合わせないことの役割獲得における必要性

結果の2）の（6）から明らかになったこととして，低い外的期待やそれに伴う期待感やサポートがない状況は役割喪失につながってい

た．Heard（1977）は，外的期待は社会の規範や義務を反映するものであり，役割行動をとる場合，時に明確にあるいは暗黙のうちに外から求められるものとした．そして内的期待と外的期待の葛藤を調整，意思決定をすることによって新しい作業役割遂行がなされると考えた．つまり社会の規範や義務の内容に応じて変化する外的期待と，個人が自らに求める期待である内的期待との調整を図り役割を獲得するとされる．規範とは「行動や判断の基準」であることから（松村編，1988），外的期待が低くなる背景として他者・社会が有する判断基準が備わっているといえる．その一例としてParsonsの病人役割概念は参考になるだろう．「病人は，病気の状態それ自体を望ましくないものと考え，できるだけ早く病気の状態から回復しようとするよう期待されている．例えば病人は，病気の状態のまま無理して仕事を続けたり，遊びに出掛けたりしてはならないのである」（Parsons，1951/1974）．つまり外的期待による行動規範は，障害を持った人や病を持つ人に対して，障害や病の改善をまずは要求し，十全な身体を再獲得しない限り，社会的に有益な役割獲得を期待しない傾向があるとは言えないだろうか．

本研究の結果から，【存在意義も価値もないと感じる経験は辛かった】【教員としての役割が出来なくなり学内での期待の薄れを感じた】といった語りがあった．このように他者・社会が持つ低い外的期待に照準を合わせてしまうことが，障害を持つ人の内的期待を低め，障害や役割に対して否定的な認識を持ってしまうことは役割獲得の阻害因子となると考える．本研究の結果から，障害や役割に対する否定的な認識が役割獲得に結び付くことがなかったことからも，他者・社会の低い外的期待に照準を合わせないことがむしろ自己価値を見出せる役割獲得のために必要であると考える．

2）内的期待を高めるための方法

本研究の結果から，低い外的期待や障害に対する否定的な認識の影響を広げずに，障害を持つ本人の役割に対する内的期待を高めたことが障害経験を活かした役割獲得に有益な影響を及ぼしていた．そこで内的期待を高める方法について考察をする．

(1) 障害や役割に対する否定的な認識から肯定的な認識へ変化させる

結果の2）の（2）では，発症により生じた役割に対する否定的認識が肯定的認識に変化した理由，（3）では，障害に対する否定的認識が肯定的認識に変化した背景，（4）では，肯定的なサポートや周囲の期待感が役割獲得に与える影響が明らかになったが，それらをまとめると，障害や役割に対する否定的な認識が肯定的な認識に変わり内的期待が高まった背景には，障害を持ったことによる経験そのものに価値があるとの気づきがあった．上田（1980）は「障害の受容とはあきらめでも居直りでもなく，障害に対する価値観の転換であり，障害を持つことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得を通じて，恥の意識や劣等感を克服し，積極的な生活態度に転じることなのである」と述べているが，障害があっても人間としての価値は変わらないと認識することが生活の再建につながるとしている．

本研究の事例は，障害経験の価値に気づき，障害や役割に対する肯定的な認識を持てたことで障害経験を活かした役割を創造したことから，他者による肯定的な期待を持たれるようになっていた．つまり障害経験による価値が内的期待を高め，障害経験を活かした役割の遂行が

外的期待を高めていたと言えないだろうか．それは上田（1980）の生活の再建の過程にも符号する．

それでは障害経験による価値とはどのようなものだろうか．本研究の結果から，障害経験から得られた知識，他者・社会を変化させる可能性であると考える．

障害経験による知識は【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う】【自分が持つ情報に需要があると想い情報を発信した】などの語りからもわかるように，障害経験があるからこそできる助言があるという認識を持ち，それを実行することで，【障害者としての意見を必要とされている】【患者の経験があることでの発言を認められる】【当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある】というような障害経験が必要とされる価値あるものと気づけた背景があった．

経験主義の立場からは「知識の唯一の源泉は経験である」（Abercrombie・Hill・Turner，1996/2005）とされているが，障害経験による知識は，経験をした人だけが持てる唯一無二の知識であるといえる．実際の語りからも【障害のある私にしかできないことがある】という語りがあり，障害経験は，経験した人だけが持つ唯一無二の知識としての価値となる可能性があると考える（山田，2018）．

他者・社会を変化させる可能性については，【患者の経験や困っていることを通訳して医療界に伝えたい】など，障害を持った人が生きやすくなるよう他者や社会の認識を変える可能性をもつ価値のある経験ということである（熊谷編，2018）．

以上より，内的期待を高め，障害や役割に対する否定的な認識を肯定的な認識に変えるためには，障害経験が唯一無二の知識であり，障害を持つ人が生きやすくなるために他者・社会の認識を変化させる可能性をもつ価値あるものであることに気づくこと，そしてその価値への気づきから創造する役割を通して他者・社会から期待感を持たれることが内的期待を高める好循環をつくると考える．

(2) 他者・社会からの肯定的サポートや肯定的な期待感の影響

結果の2）の（4）から【視覚障害を通じた経験を必要とされて就職する】など，他者・社会からの期待感により障害経験を活かした役割を得ていたことが明らかになった．他者・社会からの肯定的サポートや期待感を得られた背景には，障害を持つ人が障害経験に価値を見出し発信する用意があることと，他者・社会が障害経験に対する価値を見出し必要としていることが必要である．

役割とは「集団内の地位に応じて期待され，またその地位にあるものによって学習される行動様式」（松村編，1989）であることから，障害を持った人の地位（社会集団における立場，身分）や行動様式について他者・社会が肯定的な期待感を持てなければ，障害を持つ人の役割獲得のための肯定的なサポートには成り難い．他者・社会は，障害を持った人は障害経験を持つ価値ある人であるという認識を持ち肯定的な期待感やサポートを行うことが必要であり，それが障害を持った人の内的期待の高まりにつながり，役割獲得のための自発的な行動につながると考える．

3）役割獲得に向けた支援方法

(1) 障害を持った人に対する支援

以上より，障害を持った人が低い外的期待に照準を合わせないように支援をすること，障害経験に価値があると気づけるように支援をする

ことが重要であると考えられた．低い外的期待を内面化し無力感を抱く障害を持った人を支援する際には，唯一無二の障害経験は価値のあることを伝え，低い外的期待に照準を合わせることなく内的期待を高められるように支援をする必要がある（小野，2018）．

障害経験の価値について，障害経験による知識を必要としている人がいること，結果の 2）の（5）からもわかるように，障害経験は障害を持つ人が生きやすくなるように他者・社会を変化させる力を持つという認識が内的期待を高めることにもつながるため，その点を障害を持った人に伝えることが必要であると考える（田中，2005）．

具体的には，障害を持った人が障害経験を基に必要とする人に助言が行える環境を創出できると良いと考える．患者会をはじめとした障害を持つ人同士やその家族が交流できる場や一般の人や医療関係者への講演機会，書籍も挙げられるだろう．臼田（2003）は片麻痺者であるが，自身が調理を行えるようになった経験を活かして，他の片麻痺者に自身が獲得した調理方法を教示する役割を持っている．

【障害者にとって住みやすい街にするってことは，高齢者だったり，怪我している人だったり，子育て中の両親だったりとか，そういう怪我している人とか，誰にとっても住みやすい街になるってことだなと想う】との語りがあったが，障害を持った人の想いを他者・社会に発信できるように役割の創造のための支援を行うことで，他者・社会の障害に対する否定的な認識が肯定的なもの変化することも期待できると考える．

（2）他者・社会に向けた支援

以上より，他者・社会に向けた支援として，他者・社会が障害を持った人に対して低い外的期待を持たず，障害経験という価値を持った人としての立場を認識できるように支援をする必要があると考える．

そのために他者・社会が有する障害に対する否定的な価値を変える必要がある．それが容易ではないことも一方の事実であろうが，他者・社会が障害に対する肯定的な価値を認識するためにも，障害を持つ人に対する支援者は，障害を持つ人が障害経験の価値を見出だせるように支援を行い，役割に結びつけることで，他者・社会の有する障害に対する否定的な価値を肯定的な価値に変えていくことが可能となると考える（松本，2017）．

語りから，【障害経験を活かした役割として行った講演を聞いた看護師から「当事者の方の発言だったから，サラッと入ったと想います」】との発言があったとのことである．そうした発言が障害を持つ人にとって障害に対する肯定的な価値を見出すことを手伝っている．障害を持つ人に対する支援者こそが，障害経験という価値を知り，役割に結びつける支援の必要性を強く認識する必要があると考える．それを実現することによって，社会全体が障害に対して肯定的な認識を持てることにつながり，翻って，障害を持つ人に対する低い外的期待を持たない社会，つまりは障害経験に対して肯定的な価値を認識した社会となり，障害を持った人が役割獲得をしやすい，生きやすい社会にもなると考える（田島編，2021）．

5．本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は，対象者が 8 名と少数であり，障害種別，年齢，発症時期，障害程度，役割内容などの観点から十分に多様な対象ではなかったことである．今後はデータ数を増やし幅広く

データを収集し，本研究で得られた仮説の検証を行いつつ一般化を目指したい．

＜文献＞

Flick,U.（2007）．Qualitative Sozialforschung. Rowohlt Verlag GmbH. Hamburg.（＝内田博志監訳．（2011）．質的研究入門－“人間の科学”のための方法論．春秋社.

Heard,C.（1977）．Ocuupational role acquisition a perspective on the chronically disabled, Amer J Occup Ther，31, pp. 243-247.

神田太一．（2018）．障害を持った人の役割獲得に向けた 支援方法についての一考察 －障害経験を活かした役割を持つ人へのインタビューを通じて－．平成30年度聖隷クリストファー大学大学院リハビリテーション科学研究科修士論文．検索日2022年1月31日 http://www.arsvi.com/2010/20190000kt.pdf

Kielhofner,G.（2009）．A Model of Human Occupation Theory and Application Fourth ed. The F.A.Davis. Philadelphia.（＝山田孝監訳）．（2012）．人間作業モデル第4版．協同医書出版社.）

熊谷晋一郎編．（2018）．当事者研究と専門知．臨床心理学増刊，10，金剛出版.

松本和久．（2017）．在宅リハビリテーションの「これまで」と「これから」～脳血管疾患に対するリハビリテーションの発展と「存在の肯定」を基盤としたリハビリテーションの構築に向けて～，京都在宅リハビリテーション研究会誌，2, pp. 5-13.

松村明編．（1989）．大辞林．三省堂.

N.Abercrombie,S.Hill,B.S.Turner.（1996）．The Penguin Dictionary of Sociology. Penguin Books.（＝丸山哲夫監訳．（2006）．新版新しい世紀の社会学中辞典．ミネルヴァ書房.）

小野真理子．（2018）．リハビリテーション医療における人間性の考察．人間学研究論集，7, pp. 55-64.

Talcott,P.（1951）．The Social System. Quid Pro LLC.（＝佐藤勉監訳．（1974）．社会体系論．青木書店.）

田島明子編．（2021）．「当事者」と作業療法．Platinum TEXT Library 臨床作業療法 NOVA2021年3月号，青海社.

田中耕一郎．（2005）．障害者運動と価値形成―日英の比較から．現代書館.

上田敏．（1980）．障害の受容－その本質と諸段階について－．総合リハビリテーション，8(7), pp. 515-521.

臼田喜久江．(2018)．なんでもできる片麻痺生活のくらしが変わる知恵袋．青海社.

山田隆司．（2018）．当事者セラピストが持つ「当事者体験」への認識とその活用からの社会的役割の構築についての考察－疾病・障害体験を持つリハビリテーション専門職へのアンケート調査から－．日本福祉大学通信教育部医療・福祉マネジメント学科卒業論文．検索日2022年1月31日 http://www.arsvi.com/2010/180200yt.htm

A Study on Methods of supporting Disabled People in defining their roles through

–Interviews with Disabled People Whose Roles Utilize Their Experience of Disability–

Taichi Kand [1], Akiko Tajima [2]

1) Social Medical Corporation Foundation Shinwakai Yachiyo Hospital General Rehabilitation Center

2) Shonan University of Medical Sciences, Faculty of Health Sciences

Abstract

Our aim was to clarify the process of role acquisition of disabled people who have utilized their own experience of disability. We conducted interviews with eight disabled people who were engaged in roles based on their disability experience. Qualitative inductive analysis was performed. The results showed the following in the process of obtaining roles based on their disability experience: i) their initial negative perception of their own role changed into a positive perception; ii) their initial negative perception of their own disability changed into a positive perception; iii) friction with other people and society changed into positive relationships; iv) there was the expectation of positive support; and v) obstructive factors were the absence of support or no expectation of support. It is deemed effective for people with disabilities to recognize the value of their own disability experience and create roles for themselves with which they can experience a sense of self-worth.

Key Words : Role, Experience of Disability, Interview